

んな思いをし、どんな涙を流したのかを思えば、我が身のつらさともにかつに捨てる気にはなれないからである。

兵舎は半地下洞窟で、入りたては真新しい丸太でつくられており、できたての兵舎であった。恐らくドイツの捕虜にでもつくらせたものか。この中は薄水の張るくらいであったが、幕舎生活の人よりはよかつたかもしれない。夏になって雨が降るものなら、屋根は土を乗せたばかりだから漏るところでなく、持ち物はグシヨグシヨ、水かきしないと中に入っておれない。狭いところに雑魚寝なのだから、湿気が充滿して疥癬が横行する。明るかつたらいたたまれないほど不潔なはずなのだが、日中も薄暗いから余り目立たなかつたのだろう。とにかくどこへも行く当てがないのだ。

冬の便所も大変である。兵舎を出て四、五十メートル走らないと便所へ行けない。外は零下何十度なのか。体のしんまで冷え切つて朝までふるえていることもたびたびであった。そんなある夜、便所のそばにあつた死体置き場あたりでカラカランカラカランと音がする。

目をこらして見ると、木のように固くなった死体を材木でも積むように二人のソ連人が放り投げながら積んでるではないか。栄養失調でやせ細つた死体はトラックにうづ高く積まれて夜陰にまぎれてどこへ運ばれたのだろう。昭和二十一年の早春にはまだ墓掘りの使役に出たことも聞かないし、一日に十人、十五人と死ぬ人があつて墓掘りが間に合わなかつたはず。あの死体はどこに行つたのか気になるところである。

疥癬の重症患者を集めて疥癬中隊、鳥目になつた者を集めて夜盲中隊、全く生地獄とはこういうところを言うのではないだろうか。

無 題

神奈川県 田 口 幸 安

昭和二十年八月八日、私が不寝番で立哨中の払暁、遠くで砲声がこだまする。非常呼集がかかる。虎林虎頭方面空爆中の非常事態宣言下る。

低空飛来の敵機は得意げに機銃掃射の雨を降らす。糧秣庫や被服庫等へは火を放ち燃え盛る。落城を振り向きつつ沈痛の思いで行動を開始。一路林口を目指し七星、牡丹江へと南下する。すでに将校間ではソ連侵攻は事前に承知であった。トラック群はことごとく爆破され、残骸長蛇のごとく延々と続く惨状をさらしていた。畑のトウモロコシで命をつなぐ。それも束の間、行手は先発隊に荒され皆無となり、カボチャのつるや雑草でしのぐ。いよいよ飢餓に陥り愛馬に犠牲になつてもらい、焼いたり水煮にしたり、調味のないまま雑のういっぱい詰め糧とする。携帯の馬肉は、雨にさらしたり炎天下の灼熱に当てたり、あるいは渡河にしたり始末の数日で、臭気を放つ。それにもかかわらず腹もこわさず無事であった。泥水すすり草をはみの連日である。被服はぬれたままで乾かす間なく、ついにシラミわく。行く手砲声谷間にこだまする。丘陵からは台頭の中国ゲリラの集団の狙撃に遭遇、あるときは農民に牧草用の大鎌やフォーク等ふりかざしての襲撃に遭う。満蒙開拓団が男女落ち合い行動をとにもにする。

背に乳飲子を負い幼児の手を引いた母子連れあり。長い行程の追従は並み大抵ではない。山を越え谷間をさまよう難関の克服である。足手まといになる幼児二人殺す母あり、苦悩の顛末である。橋のたもとへは母子抱き合つた死骸にむしろがかけてある。

小生疲労度高く困ばいし、限界を迎える。口内乾き汗出ず、脱水症状となる。加えて編上靴は破綻して足を傷め歩行困難となり、落伍のやむなきに至る。鈴木軍曹や高橋伍長に叱咤激励され、肩を借してくれる。編上靴は浦川上等兵が予備用に携帯していて譲つてくれ、救われる。掖河では激戦の跡を見る。彼らの鉄帽散乱、見習士官の遺体あり。トウモロコシ畑で立哨の兵が「敵発見三人我が方へ行進中」との絶叫に配備につく。緊張の一瞬である。何と接近の一人は背広姿で通訳を伴い「あなたたちを迎えにまいりました。もう戦争は終わりました」と呼びかける。信用せず対峙のところ、大隊より無条件降伏の伝達に無念の号泣、茫然自失の態である。

一か月間の行動に暮が下りる。八月三十日夕刻、並

布呂仁の駅前にて武装解除、日本刀や小銃の山、持ち物の検査行われる。銃口突きつけ腕時計や万年筆等取り上げが始まる。彼らにとつては珍しい貴重品である。女性兵士が傍観する。虜囚の恥辱を受ける。ソ連は照明弾連発して夜空を彩る。戦勝祝賀の様子にうかがわれる。その夜は廢墟で一夜を明かす。海林仮收容所へと移送される。滞在二週間鉄舟をめぐらとする。神保上等兵の病死に哀悼の合掌。今度は拉古收容所へと移行。厩舎がぬぐらである。敷わらの中に潜る。朝夕は肌寒を覚えるようになる。当所で久しぶりドラム缶風呂に入る。入浴したものの墨汁のごとく真つ黒である。それでも入浴気分を味わう。いよいよ晩秋ともなり、野山は黄葉化す。寂漠冷気肌にしみるようになる。装具点検、取り上げは続く。一兵のごときは五、六個の時計腕にして自慢の態、ことごとくネジ切る。ベルのなかった目覚まし時計不意に鳴り出し、びっくりして投げ捨てて一幕もある。

虎林よりの看護婦は、陸軍軍服姿もりりしく隊伍整然として入所。断髪の坊主頭に略帽着用である。ソ連

兵の暴行防衛のための扮装である。邦人女性の場合は、赤チンキ口に入れ、あたかも結核患者の咯血を装い、苦肉の一策の防衛で撃退する効果てきめんの手段である。当所は開拓団も同居する。十日間在所、十月である。

出発命令下りどこへともなく連行される。巨砲搭載の山のごときソ連軍の大型戦車数台轟々悠然と引き揚げる。ようやく牡丹江駅の集結地へ到着、ソ連軍将校はいわく「お前たちは日本に帰るのだからナイフ、カミソリ、フォーク等一切提出するよう」と命令。「サムライはら切り」とあやしげな口調である。言われるままに帰還を信じて惜し気もなく放出。一同安堵の大悦に入る。

二段装置の貨車へ乗り込む。汽笛一声の発車。ストープは気合いがかかり、馳走のもてなしに至極満悦感、有頂天に達し、歌まで出て、明朗快活の雰囲気みなぎる。過去の辛苦の疲労吹き飛ばす綏芬河を渡ったところで方向違いに気づき、憂慮の色濃厚となり失望落胆、意気一変して銷沈無言のうち奥へ奥へとひた走る。小

窓より車外をのぞいたら、同胞の作業姿を見かける。まんまと謀略にかかったのである。道中四日を経て十月二十五日、方向不明の林立するシラカバの山中へ放置される。雨は転じて雪となり銀世界と化す。夢にも見ないシベリアであった。信用していただだけに衝動の度は高い。クレドールのラーゲルの入所であった。いつ帰れるともわからない絶望のどん底にたたき落とされる。三重の鉄条網に囲まれた丸太組み合せて、屋根は薄い小板張り合わせぶきの建物である。望楼には警備兵の目が光る政治犯や思想犯等の流刑地である。

いよいよ強制労働始まる。前後にマンドリン銃を手にしたソ連兵監視のもとに狩り出される。越冬に備えてまき運搬の作業である。寒冷殊のほか厳しく辛酸をなめる。雪は解けることなくえりを立たせる。十一月上旬というのに何ら防寒設備はない、食事といえれば極少量の穀物入りのスープに、主食の黒パンは小マツチ箱程度の殺人的給与である。それにもかかわらずノルマ達成の酷使である。言語に絶する過酷極限の域を脱する。憔悴至極の辛酸をなめる。水飼食に過ぎず、飢

餓に耐えかね、群衆のアブを捕まえ腹中の糖分をなめたり、冬眠の松食虫の幼虫を焼いて食べたり、ハチの子焼食等忘れがたい美味である。唯一の栄養源である野バラの実やコケの実、百合の球根葉や雑草、線路の古びた枕木の毒キノコ等手当たり次第の貧食である。たばこの代用はヨモギや松葉といったもの、愛煙者は二重の苦悩である。栄養失調の上に貧食にて下痢患続発である。妙薬は消し炭で、効果てきめんである。まぶたへこみ、膝ガクガクで歩行困難となり、心はたかぶり、いらいらの態である。疾病発生猛威のまん延に、年老いた順に、夢に見る妻子の名呼びつつ逝く。山中穴掘り埋葬する冬期の凍土の穴掘り困難にして、たき火して解凍して掘る始末である。墓標もないまま永遠に眠る。

冬期のシラカバの丸太渡した踏み台での露天の排便、吹き荒ぶ身を切る寒風にさらされ、痔を悪くし鮮血で彩り、あたかも美術品のごとく陽光に色彩を放つ凍糞の山である。排尿即凍り水晶のごとく光彩を放つ。用紙なく軟草や木の葉等の代用である。入浴は名ばかり

りで一週間に一回、小さな桶一杯の湯で体を洗いスト
ーブで乾かす、その間乾燥室で衣服の滅菌、シラミの
駆除である。

酷寒下、夜の戸外での点呼となり、ソ連軍将校の少
尉は数え直し回を重ね、佇立の麗えに悲憤の余り見か
ねた大隊長の元浦大尉はいわく「あの月を見上げシベ
リアで見る月も祖国で見る月も同じだ」とさえ切った
満月を指して慰謝する。数え直し八回を覚える。

移動命令下り雪中さらに奥へと寒風吹きすさぶ中を
行軍。(約二里間隔にラーゲリあり) 伐採まき運搬等
へ従事。やがて無意味な元旦を迎える。元浦隊長年始
に訪れ「今年は帰る年だ、お前たちのそんな姿を見る
と情けない。ゆっくり歌でも歌ってにぎわってくれ」
と鼓舞して、落涙をふいて去る。転属の都度乞食のご
とく腰につるしたさびた食器代用の缶詰の空き缶三個
音立てての流浪の旅。こんな見すばらしい姿、近親者
に見せたらどんな顔するだろうと思考する。情けない
てんまつである。食事の分配ともなれば異様な目の輝
き、凝視するところである。殺風景な屋内丸太組み合

せの上に土を塗り、石灰溶かし塗布。ペンキ代用明る
い屋内となり暖を得る。

日本人の器用に一驚を喫する逃亡二件あり、不成功
に終わる。方向不明の大広野の酷寒である。行く手
には群狼が待ち構えている、夜ともなれば群狼の咆哮の
声頻繁にして、安易な逃避行成功するはずがない、望
郷の念激高。

話は故郷をしのび、帰つたらもちやだんごに銀飯、
あれこれ食べたいと空しい連想連夜のことである。走
馬灯のごとく祖国へ馳走するやるせない心境である。
草中に潜んでいる蛇を捕食したり、あるいは牛の角を
焼いてかじったり、毒草等手当たり次第の貧食に三、
四人の者は瀕死の重体に陥る。一人は死亡する始末。
作業は執拗に追い立てられ、達成するまで酷使される。
働かざる者は食うべからずの鉄則で束縛される。ある
ときはバラスを低所より高い貨車への積み込みでおび
ただしい辛苦、著しい体力の消耗、長時間を要する。
はたまた大排水溝掘り等で限界を迎える。

二回目の正月を迎える、ただ休み与えられるのみで

ある。望郷の念にかられ、正月風景を空想にふけるあ
あ哀れな籠の鳥である。製材工場は重労働を強要され
る、殊に夜間の作業は酷寒下とあつて艱難辛苦である。
材料を切る鋸の音はジャージャンと響き、静寂な夜を
破る。木材をトラックに積載するヨイトマケ、その掛
け声も身を切る思い。野外酷寒の夜空に響き耳朶(じ
だ)をうがつ。想像しただけでも鳥肌が立つ。ノルマ
の酷使である八時間で達成できない場合は強制残業に
持ち込む始末。製材関係は冬期が絶好のチャンスであ
る。なぜかと言えば、川や湿原等で搬出困難の障害あ
り、時期を待っての行動である。川は厚い氷に閉ざさ
れトラックの往来が容易である。一方数人の犠牲者も
出る。伐採中大木の下敷きになり、脊椎や関節等の骨
折または即死の状態、あるいは搬出中のトラックの荷
の上へ乗っていて、用具の鉄棒落とし拾おうとするせ
つな転落して、車輪にひかれてせんべい見たいに圧死
の惨状に、目を覆う悲哀な往生であった。電動鋸で頭
部や指切断のけが人も絶えなかつた。零下五十度の骨
髄まで浸透の酷寒である、銀世界は凍結して解雪する

ことなぐあたかも凍室にいるかのようである。破れた
衣袴や外套、靴等をまとい、見るに忍びない姿で、酷
使の始末で情けない思いにかられてならない。鼻は白
化して警備兵は雪でさするよう呼びかける。足踏みし
たり体を動かしていないと凍傷にかかる。そのままの
入室の暖は最も危険である。トラックのタイヤや滑り
どめの鎖巻いて走行のチャリンチャリンの音も寂莫の
感懐である。瞬く冷めたい銀星に木枯らしは一しお厭
しい。「星空を仰いで故郷をしのびつつ」頭足交互の
就寝の我が家は狭い幕舎で、寒冷はなはだ痛度を越す。
ストープも役目果たさず、舎内の四角へは氷の花が咲
く。さながら冷凍庫のごとし。排尿一夜に七回を記憶
する。眠りを得ず睡眠不足のまま作業に狩り出される。
それにもかかわらずノルマの強要である。ソ連兵は自
分たちと同じ思いで襦袢袴下で寝ろというんだから、
全く矛盾したことである。外套一枚かけての就寝は震
えとまらない。

壁新聞や日本新聞等発行されるようになる。選拔者
は中央ハバロフスクへ派遣され、共産主義の教育を受

け帰所して、徹底的普及に全力を傾注する。青年共産党突撃隊が組織され、赤旗の歌インターナショナル斉唱して共産主義の吹聴に躍起となり大わらわである。突撃隊は赤旗陣頭に早朝より夜遅くまで働かされる。ソ連婦人は真紅の和服の肌着を着用して、得意げな満面の笑をもらす。別世界にあり懐かしく一際人目を引き一層望郷の念を狩り立たせる。

満州よりの持ち込みである。祖国より俘虜用返信はがき届く。近況を知り安堵の満悦。半信半疑の往復、やはり届いていたのである。四月二十二日受信とある。

冬眠の草木はようやく息吹き、活気の摘み食いの喜びである。あたかも牛馬に等しく原始的に戻る。焦慮の数人帰りたい一念から断食して、瘦軀となり、あるいは多量の飲水で下痢をすることで容姿を崩壊する仮病を装う手段を講じて入院志望する。

昭和二十二年九月一日のことである。屋内で横になっていたら、衛生兵が訪ずれ今から名前を呼ばれた者は直ちに入浴と伝える。それとなしに耳を傾けたら意外にも私の名前を呼ばれ、夢に見たタモイであった。

真実だろうかと疑いの夢心地の態であった。躍如の歓喜ようやく籠の鳥の解放である。出発に際して民主グループの講師は諸注意、事項を伝える。もし宣伝部員にソ連の質問としてどこがいいと思っただかと問われたら「人種的偏見がない」と答え、悪いと思っただところはと問われたら「辺ぴの山中にあり、实际的に知識を得なかつた」と答えると教示、後顧の憂いを残さないように努めるよう、最終集結地まで行って後退させられた実例ありと念を押す。

被服検査入念に行われる。ナホトカへの途中、車外で石に腰をおろし被服検査の記帳で夢中になっていた某上等兵は輸送指揮のソ連将校に声をかけられ、夢中のあまり目に入らず、応答せず立腹ついに残留となる。我らのために懸命に尽くしてくれたのにまことに気の毒である。心境いかばかりと察するのには、余りにも無情で哀憐の意を寄せる。集結地のナホトカもほど近いというのに、ひたすら呆然として無念涙にくれる後髪引かれる切ない思いであった。輸送指揮のソ連少佐は頑固一徹で、わずかのアラ探して虎視眈々、服装の厳

正、敬礼の励行等で束縛される。

集結地のナホトカではグループの活動めざましく、大勢で携っていた。熟弁に圧倒される。壁新聞等も大々的誇大揭示で、徹底的共產主義の思想普及樹立に大わらわであった。乗船の日まで使役に動員される。九月十四日、待望の引揚船第一大拓丸乗船、午後四時出帆、誘導艇の先導で出航。一路函館港を目指す。

飢餓地獄

岩手県 石橋 喜治郎

抑留といえば、十人中十人が口をそろえて、飢えと労働の苦しさ、そして寒さを語ると思います。四十余年を経た今、振り返っても、一番先によみがえるのが、飢えと寒さと労働の思いしか残らない。

抑留生活では、腹が満たされた日が数えるくらいしかなく、空腹を抱えさまよい歩く野良犬姿だった。現実離れして想像することができない地獄の底を、大勢

の男たちがひしめき、その行動はまさに餓鬼道の様相を呈し、食を求めぬあくなき執着心は、鬼気迫るものがあつた。

収容所の一日は、まず貧しい朝食から始まる。用便を終えると、即食事の態勢に入り、歯磨きや洗面等、朝の忙しい身支度も必要がない。食事当番の運ぶ朝食を待つだけである。

一張羅のあかじみた服を着て寝るので、起きて着替えずしなくても作業衣となり、至極便利である。炊事用水、飲料水以外に水の蓄えがないから、顔や手足を洗えるのは入浴のときだけでした。普通の生活感覚の朝を迎えることなど及びもつかないし、不衛生な状態も何ら意に介せず、平気なものである。当番が炊事所に行き、配給される黒パンのかたまりと、煮込み雑炊を運んでくる。毎日変わることはないメニューです。雑穀類と、野菜・魚・肉等配給の品々一切を炊き込み、増量した煮込み雑炊が運ばれる。朝より夕食が若干固いのが通例でした。朝の雑炊は、やわらかくて持ち歩きできないので朝食となり、パンが昼の携行食です。